二〇二四年七月五日

床掃除こぼれし玉の汗も拭き　あひる
水無月や銀糸のごとく日照雨過ぐ　むべ
夜濯ぎす三兄弟のユニフォーム　かえる
万緑に包まれてゆく山路かな　澄子

二〇二四年七月四日

禅寺の石に問ひもし縁涼し　もとこ
湯ほてりの鎮まるをまつ藍浴衣　澄子
伸び代は有ると励ます夏期テスト　みきえ
青年の指良く撥ねて祭笛　よし女
頂上は銀座さながら登山人　せいじ

二〇二四年七月三日

苑統べて匂へる丘の花棟　澄子
異常気象お化け胡瓜がぶら下がり　明日香
辞書繰れば頁はりつく梅雨湿り　むべ
噴水のおこぼれ貰ふベンチかな　康子
引ききつて鈍色展ぐ梅雨干潟　よし女
汗拭ふ版元総出荷積み終へ　むべ

二〇二四年七月二日

夏帽を押さへ吊り橋渡りけり　みきお
畳紙に尺寸のメモ夏衣　よし女
一本のバナナ噛りて朝餉とす　うつぎ
耳もとに藪蚊の唸り閻魔堂　なつき
麦刈を終へたる丘の縞模様　風民

二〇二四年七月一日

突と雨止みて夏越の大祓　うつぎ
寝息立つ老母へ優し扇風機　康子
起き抜けに避難警報梅雨しとど　董雨

二〇二四年六月三〇日

荒梅雨や瀬音のたぎち止む間なし　千鶴
追風に身を折りたたむ蓮広葉　ぽんこ
常濡れの苔の滝道な滑りそ　せいじ
鮎釣りの竿が撫でゐる水鏡　かえる
手擦れせし父の歳時記晒しけり　澄子
樹も家も傾く登山電車かな　風民
万緑に吸ひ込まれたる遊歩道　康子

二〇二四年六月二九日

外仕事ままならぬ梅雨断捨離に　明日香
双龍が襖にをどる夏座敷　もとこ
学び舎の昼灯す窓梅雨最中　満天
空馳せる雲の白さや大夏野　澄子
大屋根を太鼓打ちせる男梅雨　かえる

毎日句会みのる選・二〇二四年七月九日